

# 「Swanblade」を用いたESDのコツとピットフォール

講師

森田圭紀

Yoshinori MORITA

神戸大学医学部附属病院消化器内科

## はじめに

早期胃癌に対するESDは現在、多くの専門施設で標準手技として導入されているが、電気メスを用いて粘膜下層を剥離するという手技の性格上、出血や穿孔といった偶発症の頻度が高く、熟練した技術が要求される。また、詳細な病理評価のためには、熱変性の少ない十分な粘膜下層を含んだ質の高い標本を得ることが重要である。そのためには、剥離深度を意識した、いわゆる「Quality controlled ESD」のコンセプトに基づき、固有筋層の直上かつ血管網の下を狙った一定の深度での粘膜下層剥離技術が求められる<sup>1)</sup>。

## 「Quality controlled ESD」を容易にするデバイスの開発

現在、ESDに用いられているデバイスにはさまざまなものがあるが、それぞれ一長一短がある。Dual knifeやFlush knifeなどの先端系デバイスでは、細かい処置が可能な反面、効率性には限界があり、また先端が絶縁されていないため穿孔を起こす危険性が高いとされる。また、IT knifeを代表とするブレード系デバイスは、先端の絶縁チップにより比較的安全で効率的な剥離が可能であるが、狭い部位では取り回しが悪く、緻密な処置も行いにくい。

そこで、筆者はESD初心者にとっても上述の「Quality controlled ESD」を安全かつ容易に行えるように、“For a safe and precise dissection”をコンセプトに掲げ、まったく新しい形状のデバイスを考案した。